



## 友だち活躍

日曜日の夜7時半からNHKで「ダーウィンが来た～生き物新伝説～」という番組をやっているが見たことがあるだろうか。26日（日）の「東京 アナグマのキャンパスライフ」というを見ていたら、なんと！高校の同級生が出ていた。どんな番組だったか、NHKのホームページから引用すると、

北海道や沖縄をのぞく日本全国に生息するアナグマ。里山の森に暮らし、古くから身近な存在でしたが、詳しい生態はほとんど知られていませんでした。広大な範囲を動き回り、10個以上もの巣穴を掘って移動を繰り返すため、姿を捉えることが極めて難しかったのです。ところが最近、東京・三鷹市の大学キャンパスに複数のアナグマが生息していることが確認されました。取材班は、研究者や学生の協力を得て、30台を超える無人カメラを設置。半年に及ぶ観察の結果、兄弟が協力して巣穴を掘ったりオスとメスが求愛する様子など、貴重な生態の撮影に成功しました。さらに、キャンパスのアナグマたちが近隣の住宅地にも進出していることが判明。家族そろって庭で水浴びしたり、民家に忍び込んでネコの餌を失敬するなど、人の営みをも巧みに利用する大胆でしたたかな素顔が見えてきました。秋、アナグマたちは冬ごもりに備え、キャンパスの森で木の実などを食べ、春の2倍近くまで体重を増やします。そんな頃、取材班はアナグマたちが不思議な場所に入りしていることを発見。校舎の地下にある巨大な空間に集まっていました。お湯が流れる配管が通っているため、外に比べて気温が6℃も高くなっています。アナグマたちはここを冬ごもりの場所としてすっかり利用していたのです。謎に包まれていた動物、アナグマの素顔に迫る密着ドキュメント！

このキャンパスが三鷹のICUで、文中に

登場する研究者というのが、友人の上遠岳彦くん（ICU教授・生物学）だったのである。

もう一人、年末の朝日新聞12月29日に「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー大賞の図書館長」として登場したのは、部活まで一緒だった平賀研也くん。記事を引用すると、

東京では、外車輸入販売会社の経営改革を担っていた。一人息子の小学校選びに迷っていたころ、長野県伊那市の小学校が、のびのびとした教育を実践していると聞き、親子で見にいった。日本アルプスに抱かれた大自然。人々の柔らかさ。終電で帰宅する毎日とは別の世界があった。2002年、退社し、家族で移り住んだ。

江戸時代、高遠（たかとお）藩があった土地の暮らしには、歴史と文化が根付いていた。ただ、その価値に住民が気づいていない。「お客さんではいたくない」と、情報通信技術で地域の活性化を進める市の委員に応募した。07年には公募で伊那図書館長に。「図書館を拠点に、ITで人々と歴史や文化をつなぎ直してみようと思ったんです」

学校や博物館に眠っていた古地図を使い、旧城下町の地図上に自分の現在地を表示して街歩きを楽しめる携帯端末用のアプリ「高遠ぶらり」を開発した。住民と一緒に歩いて街を再発見し、歴史をたどった。高遠藩内藤家の下屋敷があった縁で、東京・新宿御苑周辺の「内藤新宿ぶらり」もできた。

図書カードを作った人には地域通貨「りぶら」を発行する。図書館で使わなくなった本と交換でき、地元商店で割引券にもなる。

NPO主催の賞で今年、先進的な取り組みが「地域資源の創生」と評価された。「図書館がただの貸本屋じゃないと証明できて、うれしいです」

この25Rにも、将来の有名人がいるかも？